D　嚥下訓練中に濃厚接触者となった訪問看護ステーションの言語聴覚士の事例

摂食嚥下障害のある利用者Dさんとのリハビリは、食事をするために必要な舌・口唇・頬等の筋力強化や誤嚥してしまった時に食物を吐き出す訓練を行った。当日Dさんは平熱で他のバイタルサイン、全身状態もいつもと変わりなかった。摂食嚥下のリハビリのため、言語聴覚士はマスクを着用していたが、Dさんはマスクを外してリハビリを行っていた。

Dさんのリハビリ介入の２日後、Dさんが熱発したという連絡が入り、翌日DさんはPCR検査で陽性となり、発熱の２日前にリハビリ介入した言語聴覚士は濃厚接触者となった。

DさんのPCR陽性が判明した後、言語聴覚士の訪問は中止し自宅待機としたが、言語聴覚士がDさんと接触後PCR陽性の報告があった５日間に18人の他利用者のリハビリを行っていた。言語聴覚士はマスクをしていたが、12人の利用者が嚥下訓練のリハビリのためにマスクをしていなかった。

Ｄ　討論ポイント

１　言語聴覚士の所属する看護ステーションの管理者が最初にとるべき行動について考えてください？

２　ステーションに一人しかいない言語聴覚士が濃厚接触者になったことを利用者に知らせる必要がありますか？

３　双方がマスクをすることが出来ない状態で行う摂食嚥下リハビリテーションにおいて、濃厚接触にならないためにはどのようにしたらよかったのでしょうか？